馬獣医のよもやま話㊷　柴田　良獣医師

子宮内膜炎について

門別診療所　柴　田　　良

子宮内膜炎は、不受胎や胚死滅の主な原因の1つです。しかし、一口に子宮内膜炎といっても、繁殖牝馬の不受胎や胚死滅に関わる子宮内膜炎には主に３つの種類があります。今回は簡単に、その３種類の子宮内膜炎についてお話したいと思います。

①　感染性子宮内膜炎

子宮内に細菌や真菌が感染し、子宮内膜に炎症が起こる状態です。診断には、綿棒で子宮内膜を拭ったり、子宮内に生理食塩水を入れて回収するなどの方法でサンプルを回収し、細菌や真菌の感染を検査します。治療は、原因菌に効果のある抗生物質や抗真菌剤の子宮内投与が中心になります。

②　持続性交配誘発性子宮内膜炎

交配による精液を子宮内から除去しようという一過性の炎症は、正常な防御反応です。しかし様々な要因で、この反応が持続した場合が持続性交配誘発性子宮内膜炎という状態で、不受胎や胚死滅の原因となります。交配後の過剰な貯留液、子宮浮腫の増加、子宮洗浄液の混濁などで推定診断を行います。治療には、交配後早期（交配後４時間～遅くても24時間以内）の子宮洗浄や子宮収縮剤の投与、交配時のステロイドの注射などがあります。

③　慢性退行性子宮内膜炎

加齢や分娩または交配により起こる子宮の炎症の蓄積の結果、子宮内膜組織の変性が起こった状態です。その結果、受胎や妊娠を維持する能力が低下します。子宮内膜の一部を採取し、顕微鏡で観察することで診断されます。慢性退行性子宮内膜炎は、一般的に治療により良化するものではないと考えられていますが、子宮内の灯油の注入により良化したという報告もあります。また、慢性退行性子宮内膜炎の馬は、前述した感染性子宮内膜炎や持続性交配誘発性子宮内膜炎に罹患しやすいと言われていますので、それらに対する対策も必要です。

日高軽種馬農協では、毎年秋に、不受胎馬検査を実施しています。不受胎馬検査では上述した子宮内膜炎の検査を中心に行っています。今年も10月下旬～11月上旬にかけて実施する予定ですので、もし受胎しづらい牝馬や頻繁に胚死滅が起こる牝馬がいれば、当組合の不受胎馬検査の受診をご検討いただければと思います。

※本紙、軽協たより９月号の送付に不受胎馬検査申込書を同封しておりますので、そちらもご確認のうえ申込をお願いいたします。